

**初妊牛の事故率を低減する意義**

2012年度の畜産物生産費統計によると、牛乳の年間生産費に占める乳牛減価償却費は、10万8848円である。償却期間が4年間であることから、多くの乳牛は、償却を終えると同時に農場から出てしまっていると考えられる。特に、導入牛が事故で廃用される場合は酪農経営を左右するほど影響が大きい。そこで、今回は導入牛の事故の低減に取り組んできたJAあいち経済連の事例を紹介する。

**愛知県での取り組み**

導入牛の事故率(死産・流産死産といった輸送保険の対象となる事故)は全国平均でおよそ3%となっている。しかしJAあいち経済連管内ではほぼゼロに近い(図1)。これは導入牛に対して血液・尿検査を徹底化することによって課題が浮き彫りになり、適切な対策を施せるようになったことが要因である。

**その管理ポイントを紹介しよう**

- 導入当日**
- ①搾乳牛から離れた風通しの良い場所で飼う
  - ②水、牧草を十分に与える
  - ③乾乳期用配合飼料を0.5kg与える
- 導入2日目以降**
- ①乾草を不断給与、乾乳期用配合飼料は様子を見ながら、最大2kg与える
  - ②3日目でも食べない場合は、獣医師の診察を受ける

**CASE STUDY 初妊牛の事故を減らせ!**

**生産性向上のための優良事例(乳牛)**

飼料価格が高騰するなか、初妊牛市場価格もかつてない価格帯で推移する状況が続く。酪農経営を成り立たせるためには、事故を減らして牛を簡単に廃用しないための取り組みが必要だ。事故率を0に抑えたJAあいち経済連の事例を紹介しよう。



所在地:東海地方  
飼養頭数:ホルスタイン種経産牛130頭、  
未経産15頭  
従業員数:2名

**分娩21日前以降**

- ①乾乳期用配合飼料を牛の大きさに合わせて3~4kg与える
  - ②分娩2週間前からは、エサを残していないかどうか注意する(産前乳房炎かケトosisの恐れがある)。
- 基本的には、「初妊牛も乾乳牛と同じ」である。ただ、初妊牛は多くの場合、「長距離輸送」のストレスが加わることから、より注意が必要になる。

**現場での取り組み**

ある生産者に話を聞いてみた。この牧場は経産牛・未経産牛を合わせて140頭ほど飼養しているフリースタイルの農場である。こうした取り組みは2006年から行っているという。

未経産牛と乾乳牛は粗飼料にスーダン乾草が与えられている。噛んでみると甘みがあり、粗っぽい見た目のわりには乳牛がしっかりと食い込めるという。また、分娩が近づいた牛(いわゆるクローズアップ期の牛で分娩前3週間)に対しては、額に赤い印をつけて、個別に乾乳期用配合飼料を与えている(写真1)。

初妊牛と並行して、乾乳牛への取り組みも始めたが、現在ではどちらにもほとんど分娩事故が見られない。獣医師の受診が必要な場合でも、治療によって回復する牛ばかりだ。これまでに産次数が3・0産を上回る良好な成績を収めている。

事故が少なくなるということは、目に見える事故だけでなく、その予備群の牛も少なくなったということである。事故予備群の牛が少なくなれば、農場全体と

しての生産性も向上するうえ、生産者側の心的ストレスも軽くなる。この農場では「乳牛を健康に飼う」ことを目標としており、乳量を増やすことには全く執着していない。こうした収益性を最大限に追求できる酪農経営が今後求められていく。



乾乳牛に給与する乾草はスーダン乾草のみ。給与すればするほど食べてしまうため、給与量をコントロールしている

乾乳期用配合飼料はロックをかけて、分娩が近づいて目印をつけた牛に対してのみ給与する

写真1

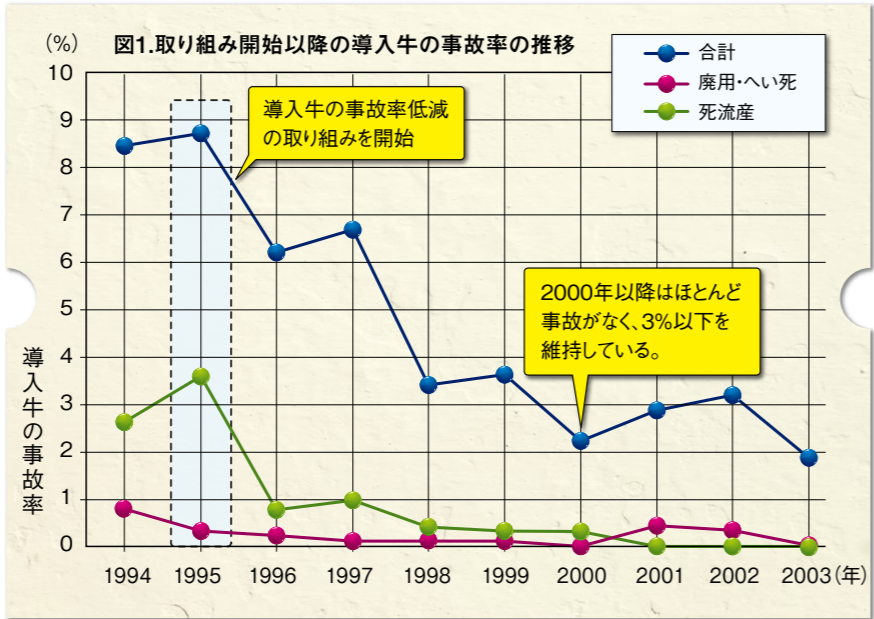


写真2.夏場に発生する虫対策のために張り巡らせた防虫ネット。搾乳中に、牛がおとなしく搾られるようになった



写真3.定期的に敷料を交換し、清潔なストール